



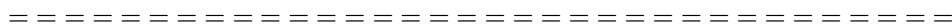
地域日本語支援ニュース こだま 第 349 号

2018.11.8



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる■

36 年前に幼くしてベトナムから家族と共に難民として来日した長田（おさだ）さんは、現在、子育てとフリーランスのベトナム語通訳の仕事で、大忙しの毎日です。来し方を振り返り、今ある自分、そして娘さんへの思いを書いてくださいました。

.....

ルーツ

長田恵美（おさだ さとみ 旧姓：宇野）

私は 1 歳半の頃、両親に連れられ祖国を脱出しました。ボートピープルとして日本にたどり着いて定住し、現在は帰化をした、ベトナム系日本人です。

祖国を離れ、海外で生活する上での苦労は、両親が一番に経験しています。愛する祖国に帰れない上、言葉も文化も異なる異国の地での生活は、いわばマイナスからの出発であり、通常の海外移住以上の精神的負担があったかと思います。それでも両親は、弱音も吐かず、私たち子供のより良い未来のためにと、がむしゃらに頑張っていました。私は子供ながらに、その姿をずっと見てきました。

そんな両親の下で育てられた私は、日本の幼稚園から始まり、小・中・高・大学と、他の同年代の日本人と変わらない教育を受けさせてもらいました。違いがあるとしたら、それは、家庭内ではベトナム語を使用し、生活も多くはベトナムの文化風習に沿っていたという事でしょう。特に亡き父の影響が私に

とってとても大きかったと言えます。

その教えで、ずっと私の中にあるものは「自分のルーツを忘れるな」です。

なぜ自分たちが祖国を離れて海外で生活をしなければいけなかったのか、その自分たちを受け入れてくれた国や人々に対する恩義を忘れるなど、事ある毎に語る父の話を、幼いながらにとっても真剣に聞いていたのを思い出します。自分の言葉に偽りがなく、実直で誠実な人生を歩んできた父の言動には重みがあり、説得力がありました。そんな父の仕事だった難民の相談や通訳の現場にしょっちゅうくっついて行き、色々な事を学ばせてもらいました。

こうして、親の言う事は絶対であった私ですが、成長していく過程で、親の考えに賛同出来る事と出来ない事があるという事に気づくようになりました。言葉や文化の違いには苦労しなかったものの、世代間、個人間の考え方の違いには苦労しました。

色々悩んだり苦しんだりした期間もありましたが、最終的に、私は、「良いと思うものや合うと思うものは取り入れ、その反対は無理して取り入れないようにする」ことにしました。自分のルーツをベースに、そこに自分が取り入れていきたいと思ったものを重ねていくことによって、誰とも違う、自分自身を作っていくことが出来ている自分に気づいたのです。バイリンガルであることで経験できる事やわかる事も多く、そのおかげで取捨選択できるものも多かったと言えます。

私は縁あって、日本人の夫と結婚し、昨年娘を出産しました。娘にはなるべくベトナム語で話しかけています。安産祈願、お宮参りや初節句など、娘に関わる行事は、ベトナムと日本、両国のものを行ってきましたし、今後もそうしていくつもりです。ベトナム色を出さずに、日本人として娘を育てていくことも私には出来ます。だけど、私は娘に知っていてほしいのです。彼女のルーツを。彼女の母親はベトナム系日本人で、彼女にはベトナム人の血も流れているという事を。どうして彼女の母親は日本人になり日本で生活しているのか、彼女の母親を産み育ててくれた祖父母がどんな人達だったのか、そして、そういった過去があったから、今の彼女がいるのだという事を。

父が私にしてくれたように、娘にも、幼い頃から色々な話を聞かせ、たくさんの経験を与え、そして違いを許容したり楽しめたりできるような人間になっ

てほしい。今あるこの環境や多様な文化を感じ取り、人生で選択を迫られた際に、良くも悪くも、より多くの選択肢を見つけ、悩んで、そして自分で決めていってほしいと思います。自分の人生に悩みつつ進むべき道を選べることは、とても幸福な事だと思います。よりたくさんの事を悩んで乗り越えていく事により、より人生に深みが出て、より許容力のある人間になれると思います。

そのためにも、自分のルーツを知ることは、人生で行き詰ったり、悩んだりした際に、解決策を見出すのにきっと役立ちます。どんなルーツであれ、無視することは出来ず、そのルーツを知る事で、自分という人間を見つめ直す事が出来るのです。そして多様なバックグラウンドを持つ事で、自分の人生を自分なりの描き方で描いていけるのだと思います。今、子育てに追われながら、改めてそう感じています。
